

## 『とはずがたり』の虚構

— 父雅忠は大臣になり得たか —

## 一 はじめに

日記作品の叙述を史実に照らし合わせる時、往々にして齟齬が見出される。それらは、「虚構」と見做されることが多い。かつて中野幸一氏は、『蜻蛉日記』における「日記の虚構性」を論じ、「虚構」というと事実と反するものと思われがちであるが、実は虚構なるが故により真実に近く、時には事実以上の効果をもたらすことがあることを見逃してはならない。この日記の虚構はいわば真実を語ろうとするための方法であって、それなるが故にいきわ迫真力をもつて読者の胸を打つのである。」と述べた。中野幸一氏の視点は、日記というジャンルにとどまらず、さまざまな作品を検討する際にも有効であろう。虚実あいまった作品の「真実」に迫るため、従来の研究は、作品の叙述を、事実・史実と虚構とに弁別してきた。しかし、さらに、その虚実のあわいを分析すれば、「作者」が伝えようとすることがらの本質に接近する糸口となり得るのではないか。本稿では、『とはずがたり』の述べる内

容の中から、そうした具体例を取り上げて検討してみたい。

## 二 雅忠と任大臣

『とはずがたり』巻一には、作者二条の父雅忠が本来は大臣に任じられるはずであった、と読み取り得る内容が三度反復される。

最初で、最も具体的な言表は次の条である。<sup>(1)</sup>

言表① すでに身正二位、大納言一臈、氏の長者を兼ず。すでに

大臣の位を授け給しを、近衛大将を経べきよしを、道□右大臣  
将書き置く状を申入て、この位を辞退申ところに、君すでに

隠れまし／＼ぬ。(巻二、二〇頁)

文永九(一二七二)年二月一七日崩御の後嵯峨院の四十九日より前に、雅忠が後深草院に提出したという申文の引用に含まれる。任大臣に相応しい資格を保持しているばかりか、後嵯峨院治世下において任大臣を要請された、とする雅忠自身の主張として描かれる。

北 條 暁 子

二度目は、雅忠没後、二条が仮定を述べる言葉の中に現れる。

言表② 大臣の位にお給はば、四品の家司などにてあるべき心地をこそ思つるに、思はずに、たゞ今かゝる袂を見るべくとは

(巻一、二九頁)

と、出家した家司仲綱を思い遣る二条の心情披瀝という形がとられる。

三度目は、後深草院の消息を引用したという叙述に含まれる。

言表③ 何さまにも、大臣は定まれる位に候へば(巻一、六二三頁)二条を庇い東二条院に宛てたとされる消息の中で、二条の呼称に關わり、雅忠生前の發言を引いたものとして描かれる。

これらの言表は、先行研究においては、史実とは齟齬を来たさないものと扱われてきた。「後嵯峨院崩御の折に雅忠は大納言主座であり氏の長者を兼ねており(巻一、四一頁)、まさに大臣の位に手の届く一步手前にいた<sup>(4)</sup>」との評がいわば通説である。しかし、申文の語る通りの打診が史実としてあったのか、また通説の理解通りに雅忠は任大臣の「一步手前」にいたのか、そうした想定の実偽を認定するために、雅忠に任大臣実現の蓋然性がどれほどあったのかを、具体的に検証しておく必要があると考える。

以下、標記の可能性を、後嵯峨院崩御前後の政治状況に照らし、時期を区分して順次検証して行きたい。

#### i. 後嵯峨院在世中

雅忠が「氏の長者」を兼ねたのは文永六年一月に中院通成が内大臣を辞した折である(『公卿補任』(以下『公』))。その際内大臣

に補されたのは、関白二条良実の男、師忠であった。超越ではあるが、師忠はすでに右大将でもあり、摂関家の子息として自然な任官であろう。この時点では雅忠は権大納言、上席には二条良教、花山院師繼の二人がいた。

雅忠が「大納言一顰」となるのはその次の任大臣の折である。

文永八年三月、師忠が右大臣に転じ、師繼が内大臣に任じられた。

後嵯峨院在世中に「すでに大臣の位を授けたまひしを」という事実があったとすれば、右の二度の任大臣の折、雅忠に先に打診があったか、それ以後なら、師繼在任の内大臣の地位を空け、雅忠に授ける話があったことになる。したがって、師繼との政治的立場の比較によって、申文の主張の真偽を検証し得る。まず、情の大きく動く文永四年から二人を追う。

文永四年、雅忠は中宮大夫を務めていた(『公』弘長元(一二六二)〔文永五〕。中宮は龜山帝の中宮西園寺嫡子で、東二条院西園寺公子の姪にあたる。雅忠は、東二条院が後深草帝の中宮だった折、その権大夫を務めた(『公』康元二(一二五七)〔正元元(一二五九)〕。院号宣下後も女院司の一員として東二条院に仕え続けた可能性は高い。『とはずがたり』の記述では簡を削られた経緯に重きが置かれるが、それまで二条が東二条院にも出仕していたことが思い合わされる。雅忠が嫡子立后時に中宮大夫を兼ねたことは自然で、かつ一貫して西園寺家寄りの政治姿勢が認められる。権大夫が四条隆顕である(依拠史料・在任期間とも雅忠に同じ)ことは、二条の後見を務めたこととの関連を思わせ、注意される。

一方、師繼は皇后宮大夫を務めていた(『公』文応二(一二六一)、

弘長二(文永四)。皇后は龜山帝の皇后洞院侂子である。所生の第一皇女は文永元年七月に三歳で夭折したが、翌二年七月に第一皇子(知仁親王)をあげていた(『二代要記』(以下『代』)『御産御析目録』(以下『産』)ほか。文永四年にはまた懷妊、六月二十九日に着帯する(『吉統記』(以下『吉』)ほか。しかし、八月二〇日に知仁親王が三歳で夭亡する(『帝王編年記』ほか。同月二十九日、師繼は大夫を辞し、土御門定実が替わった(『公』)。同日皇后は内裏から御産所の土御門殿に移った(『外記日記』)。同年末頃に予想される御産のためである。

一〇月二二日、前相国で中宮の父である西園寺公相が、四五歳で父実氏に先んじて薨じた(『公』)。中宮は重服により内裏を退出した(『増鏡』「北野の雪」)。

翌一三日には、来るべき皇后侂子御産のため、夜々定が行われた(『経後卿記』)。五夜定は後嵯峨院の殿上で行われている(『民経記』(以下『民』))。これは、後嵯峨院が五夜御産養を担当すること意味する。五夜御産養は後の父による主催が慣例である。<sup>(7)</sup>一二月一日、皇子(世仁親王、後宇多帝)が誕生し(『産』ほか)、五日の御産五夜儀には、後嵯峨院から御産儀があつた(『民』)。

明くる文永五年には、新誕皇子の御五十日儀、御百日儀が行われ(『深心院関白記』)、六月二五日親王に、八月二五日には誕生から一年も経たずして東宮に立てられた(『吉』ほか)。同日、師繼は春宮大夫とされ、定実は皇后宮大夫を辞し春宮権大夫とされた(『公』)。

中宮嬪子は除服後も再入内できず(『増鏡』「あすか川」、文永五

年一二月六日に今出河院とされた(『女院小伝』ほか。『院号定部類記』等に由来は伝わらないが、在所を院号としたと思し<sup>(8)</sup>。九歳で入内した嬪子は院号宣下時一六歳であつた(『代』)ほか。

今出河院以前に、宮中を早く退出した后が女院とされた例を、表1「退出し女院とされた后」に示す。退出から約一年後、對抗勢力の擁する幼い皇子が立太子した共通点から、嬪子の退出は、宜秋門院任子の退出を想起させる。もともと、建久の政変とは異なり、嬪子の退出は父の喪に服すためであつた。しかし、一見穏当な理由による退出とそれ以降の流れは、一種の政変と見做せないだろうか。表1に挙げた女院のうち、自発的退出と思しい高松院を除く四名を検討対象とする。鷹司院を除く三名はいずれも退出後しばらく后位にある。三条有子の、中宮から皇后への転上<sup>(9)</sup>が退出後であることなどは顕著な例である。したがって、后位剥奪のみが退出させる目的とは言えない。四名の共通点は、後宮にあれば皇太子候補を産む可能性があることである。その可能性の排除こそが、これら四名を退出させた勢力の共通する企図であろう。

ただ、嬪子の出家は退出時から歳月を隔てており、院号宣下を即、龜山天皇の皇子を産む可能性の消滅、と見做すことは躊躇される。しかし現実には、次期天皇を擁する勢力に逆らつての再入内などほぼあり得ない。九条兼実が任子の剃髪を制止したこと、及び、建久の政変を黙認した頼朝が、後年任子の再入内を要請したが叶わぬまま没したこと<sup>(13)</sup>が思い合わされる。嬪子の出家に際し、甥の公衡が「有御出家事、(是年来御素懷也、而依無事次、

表 1 「退出し女院とされた后」

院号	名	配偶	父 (養父)	入内／立后年 (年齢)	退出前の政情／後宮	退出年 (年齢)	退出後の政情／後宮	院号宣下 (年齢)	出家 (年齢)
高松院	姝子内親王	二条	鳥羽	久寿三1156年 3月 5日 (但、東宮) (16)／①保元四1159年 2月21日 (19)	②永暦元1160年正月26日 太皇太后多子再入内	③永暦元年 春 (20)	⑤永暦二・応保元1161年／8月11日公能薨去、多子服喪／12月17日育子入内／⑦応保二年 2月19日育子立后	⑥応保二1162年 2月 5日 (22)	④永暦元1160年 8月19日 (20)
宣秋門院	藤原佐子	後鳥羽	九条兼美	文治六1190年 正月11日 (18)／①建久元1190年 4月26日	②建久六1195年 (23)／頼朝女入内交渉カ／8月13日昇子内親王誕生／11月 1日 (12月 2日カ) 為仁親王誕生	③建久七1196年 11月24日曉 (24)	④建久七年11月25日父関白辞退 (「不被進御上表」「三長記」)／⑤建久九1198年正月11日為仁親王立太子即日受禪	⑥正治二1200年 6月28日 (28)	⑦建仁元1201年 10月17日 (29)
安堂門院	藤原亨子	後堀河	三条公房	貞応 元1222年12月17日 (16)／①貞応二年 2月25日中宮 (17)／⑤嘉禄二年 7月29日皇后 (20)	②嘉禄二1226年 3月 4日「后宮不可転、可被降云々」との巷説 (「明月記」)	③嘉禄二年 3月 15日 (20)	④嘉禄二年 6月19日長子入内	⑥嘉禄三1227年 2月20日 (21)	⑦寛元四1246年 9月25日 (40)
鷹司院	藤原長子	後堀河	近衛家実	嘉禄二1226年 6月19日 (9)／①同年 7月29日	②安貞二1228年12月24日家実関白罷免 (「無上表儀」【公】 (11)	④寛喜元年 7月 1日カ (12)	⑤寛喜元年11月16日嫡子入内	③寛喜元1229年 4月18日 (12)	⑥寛元四1246年 4月20日 (29)
今出河院	藤原嬬子	龜山	西園寺公相 (後深草)	弘長 元1261年 6月20日 (9)／①同年 8月20日	②文永四1267年 (15)／6月29日皇后信子着帯／8月20日知仁親王夭折／10月12日公相薨去	③文永四年10月12日カ (15)	④文永四年12月 1日世仁親王誕生／⑤文永五1268年 8月25日立太子	⑥文永五年12月 6日 (16)	⑦弘安六1283年 8月13日 (31)

※立后を①とし、それ以後の経緯に丸数字を順にふった。

表2 「春宮大夫の中宮／皇后宮職における経歴及び任大臣状況」

春宮大夫	東宮	大夫就任時期	東宮生母の後	中宮職	任大臣時「東宮」	補	足
平清盛	高倉	○	×	—	東宮		
平重盛	〃	二箇月後	×	—	帝		
平宗盛	安德	○	平徳子	×※1	帝	※1 皇太后宮 (中宮叔母) 權大夫	
花山院兼雅	〃	一箇月後	〃	×	【崩御後】※2	※2 治承・寿永の内乱	
中山忠親	〃	一年後	〃	權大夫	【崩御後】※2		
花山院忠経	順徳	○	×	—	東宮		
徳大寺公継	〃	六年後	×	—	東宮		
大炊御門師経	〃	九年後	×	—	【配流後】※3	※3 承久の乱	
西園寺公経	仲恭	○	九条立子	大夫	【降位後】※3		
九条教家	〃	一年後	〃	大夫	×※4	※4 權大納言 (三二歳) で出家 〔依菩提心也〕〔公〕	
大炊御門家嗣	四条	○	九条嬪子	△※5	帝	※5 受禪後、准母の皇后宮大夫	
西園寺公相	後深草	○	西園寺姞子	大夫	帝		
中院通成	龜山	○	〃	權大夫	帝		
花山院師繼	後宇多	○	洞院信子	大夫	東宮		
土御門定実	〃	二年半後	〃	大夫	【讓位後】※6	※6 准大臣、内大臣とも讓位後	
西園寺実兼	伏見	立坊時	×	—	帝		

「東宮」の項には便宜上諡号を記した。  
「大夫就任時期」の項は、立坊時の場合○とし、立坊時を基準にした。  
生母が中宮・皇后でない場合、後に皇太后・女院とされても×と記し考察から除いた。  
「中宮職」(皇后宮職)の項は経歴。春宮大夫着任時点での前職・現任の別を問わなかった。

自然運行<sup>(14)</sup>」と記すのは、退出が離縁とほとんど同義となる、表1の諸事例<sup>(15)</sup>の実情を反映している。后を退出させる目的は、對抗勢力にとって立坊を確実にするためだけではない。即位せず東宮を辞した先例、東宮早逝の先例もあり、立坊後も情勢は動き得る。そうした立坊後の変動をも防止すべく、周到に排除しておくのである。服喪を利用して中宮嬪子を排除し、皇后所生皇子を僅か二歳で立太子させた動きは慌ただしい。

表2「春宮大夫の中宮／皇后宮職における経歴及び任大臣状況」は、師継が春宮大夫を兼ねた文永五年から一〇〇年ほど遡り、高倉帝から伏見帝までの春宮大夫を対象とした。「中宮職」の項からは、中宮（皇后）所生皇子が立坊した場合、春宮大夫には中宮（皇后宮）大夫・権大夫経験者を任じるのが通例であることが看取される。「任大臣時の「東宮」の項からは、春宮大夫の経歴と後の任大臣に有意の相関性を指摘できる。そもそも中宮大夫は「可然上達部任之」（「官職秘抄」）、「近代華族納言等兼之」（「職原抄」）なのであり、春宮大夫も「執柄息及大臣子孫為大中納言人兼之」（「職原抄」）という官職であり、今後任大臣が見込まれるような人物が着任したとも見做せる。しかし、次代の天皇に間近く仕える重みある立場が大臣就任に結びつくという説明も、同様に成り立つであろう。

雅忠に立ち戻ると、皇后佶子所生皇子の立坊により春宮大夫補任の可能性が消えたばかりか、中宮嬪子の退出により、嬪子所生皇子の誕生を待ち次代の春宮大夫となることも見込めなくなつた。その上、文永六年六月七日には西園寺実氏が薨じた（『二代』

『公』ほか）。雅忠の親近する西園寺家にとり、関東申次を長期に亘り務めた実氏<sup>(20)</sup>の死は痛手である。

雅忠が氏長者となつた文永六年一月には、すでに右のような政情の変動を見ていた。中宮嬪子の処遇を見ても、元皇后宮大夫で現春宮大夫と、元中宮大夫との政治的優劣は歴然としている。

その後、政界地図を描き変える可能性を秘めた、東二条院による御産が文永七年九月一八日<sup>(21)</sup>にあつたものの、誕生したのは皇女（始子内親王、遊義門院）であつた（『吉』ほか。『とはずがたり』はこれを後嵯峨院崩御の前年に年次操作するが、「階下には公卿着座して、皇子御誕生を待つ気色なり」との描写は事実を伝えている。とりわけ、政治的に後深草院寄りで、かつて東二条院に中宮権大夫として仕えた雅忠は、次々代の皇位継承者有力候補の近臣たらんと待ち構えていたはずだ。期待と落胆の落差は大きかつたに違いない。文永八年三月に雅忠でなく師継が内大臣に任じられたのは当然の流れで、師継の任大臣内定以前に雅忠の辞退があつたとは考えにくい。

以上、後嵯峨院在世中の二度の任大臣の機会には、雅忠が史実として「すでに大臣の位を授けたまひしを」「辞退申」した可能性が極めて低いことが確認できた。

では、文永八年三月二七日の師継任大臣以降に、後嵯峨院から雅忠に任大臣の打診がなされ、それを断つたのか。雅忠の「源氏長者」という立場は、後の任官に影響したのか。師継と雅忠との政治的立場の比較に、院評定衆という観点を導入し考察しよう。

後嵯峨院政が始めた「院評定」は「独自の議決権をもつてい

た<sup>(22)</sup>』という。「院に対する独立性が強かった<sup>(23)</sup>」とする説と、院評定においては「院の主導権ないしは決定権は相当程度確保されて<sup>(24)</sup>」おり、「院の權威を公卿による合議制の支援をえることよつて確立させ、強化しよう<sup>(25)</sup>」としたとする説がある。院を牽制したとみるか、支えたとみるかによつて、院との関係は異なってくるが、いずれの解釈をとつても院評定衆に一定の政治力を想定してよい。その院評定に、師繼は任大臣以前から引き続き参仕している。一方、源氏長者となつた後も、雅忠は院評定衆には加えられない。例えば、文永八年九月三日には高麗牒状に関する院評定があつた<sup>(27)</sup>。その出席者は「関白殿、徳大寺入道相国、前左府、内府、堀川大納言、源中納言、帥、菅宰相、左大弁宰相等」(『吉』)である。内府師繼のほか、源氏からは氏長者の雅忠でなく、雅忠の次席の大納言堀川基具が入っていることは注目される。創設当初こそ加えられていなかった摂関も、院評定に臨席するようになったこと。それはすなわち、藤氏長者が院評定に臨むようになったことと同義である。一方、源氏長者であることは、創設当初から一貫して院評定衆の資格とはなされていない。後嵯峨院により、藤氏長者たる摂関ですら「藤原氏の寺院・神社である興福寺・春日社に關してさへ、(中略)圧倒されていた<sup>(28)</sup>」という。「氏長者」という地位の重さに比して、度々交代する氏長者その人の権限は相対的に低下していったと言えよう。源氏長者であることは、任大臣には必ずしも結び付かない。院評定衆の堀川基具などは、後嵯峨院治世下での政治的立場から、雅忠よりも実質的には自分こそ氏長者の立場に相應しい、と感じていたのではないか。』とはさすがた

り』には、雅忠没後、弔問に「基具の大納言一人訪れざりしも、世の常ならぬことなり」(巻一、三〇・三一頁)と描かれている。

このように、文永八年三月以後の後嵯峨院治世下においても、雅忠の師繼に対する劣位は変わらない。前官でも院評定に参加はできるが、師繼に敢えて大臣を退かせ前官とし、雅忠を大臣に任じる必要性は全く認められない。史実として、師繼は建治元(一二七五)年二月まで内大臣を務め、雅忠没後三年四箇月の間、大臣位に異動は生じなかった。申文における「すでに大臣の位を授けたまひし」という実績主張は文飾と言えそうである。

## ii. 後嵯峨院崩御後、龜山帝親政下

雅忠の「すでに大臣の位を授けたまひし」という主張を文飾と見なすにしても、「大納言一臈」であるなどの雅忠の立場は、任大臣の資格を主張するに充分と見える。しかし雅忠は通説の理解通り、任大臣を目前に控えていたのだらうか。後嵯峨院の崩御という要素は後に検討することにして、まず、源氏長者で大納言一臈を兼ねていても、必ずしも速やかに大臣位に昇り得る保証とはならないことを、堀川基具の事例によって確認したい。

文永九年八月の雅忠没後、大納言一臈となった基具は、源氏長者ともなった。年齢は雅忠より四歳年少である。それから三年以上経った建治元年(一二七八)二月八日、師繼が上表し内大臣の席が空いた。内大臣には一五歳の近衛家基が任じられた。家基は文永一〇年(一二八八)年七月の転右大臣まで、家基は内大臣に

留まる。その間の弘安七（一二八四）年正月に基具は官を辞した。満一年以上大納言一職であり続け、五三歳となっていた。この基具を遇するため持ち出されたのが、「准大臣」という扱いである。特殊事情により藤原伊周へ寛弘年間に与えられてから、実に約二八〇年ぶりである。このような地位を設けなければならないほど、大臣の位が空しくかつた当時の状況がしのばれる。正応二年八月の任太政大臣まで、基具は五年間この待遇を受け続けた。

仮に雅忠が生きていたならば、おそらく史実に見える基具の立場で大納言一職を長々と務め、任大臣の時を待ち続けたことだろう。作品の主張とは異なり、後嵯峨院治世下でも亀山帝親政下でも、雅忠の任大臣実現は困難であつた。任大臣実現の可能性が高かつたという主張は「虚構」と結論できる。読者の受ける「大臣の位に手の届く一歩手前にいた」との印象は、申文の文面をはじめとする作品中の主張に幻惑された結果であり、言い換えれば、「作者」の認識を正しく読み取つたものと言える。

### iii. 後嵯峨院政が継続していた場合

では、後嵯峨院がもう少し長く生きていればどうだったか。結論を急げば、崩御により事実上起こつた状況とほぼ同じだったろう。何故なら、後嵯峨院崩御後も、太政官に異動はなく、「院評定はそのまま宮中鬼間の議定に引き継がれ、議定の内容も議定衆の構成も、殆ど従前の院評定と異なるところがなかつた」ことが知られ、政治体制の変化が見られなかつたからである。申文は、

「後嵯峨院から任大臣を約束されていた。大将を経た上での任官を希望したため、先送りにしてもらつた。しかしその矢先の崩御で、後嵯峨院からの約束事は反故になるであらう」と嘆くが、これは史実に照らすならば説得力を失う。後嵯峨院の崩御が史実より遅かつた場合ですら、雅忠の任大臣は遠かつた。

### iv. 後嵯峨院崩御後、幕府による治天決定以前

後深草院・西園寺家と近く、後嵯峨院政末期には政権与党たり得なかつた雅忠には、速やかな任大臣など望めなかつた。ただし、唯一、雅忠の任大臣の可能性、もしくは期待が最も高まつた時期があつたと想定される。

申文提出と慰留の顛末が記された直後、「御仏事など果てて、みな都へ帰り入らせおはしますほどより、御政務のことに関東へ御使下されなどすることもわづらはしくなりゆく」巻一、二〇頁との叙述がある。後嵯峨院治世末期、宮中の体制は亀山帝・洞院家周辺優位で固まつていたが、後嵯峨院が治天の後継者決定を幕府に委任したため、後嵯峨院崩御後、後深草院にも治天の君となる可能性が生じた期間が僅かにあつた。ここで後深草院政が実現していたならば、後深草院寄りであるがゆえに劣位に甘んじていた雅忠の政治的立場は、浮上したはずだ。雅忠申文の論調に反し、むしろ後嵯峨院崩御によつてこそ、雅忠の即時任大臣の可能性も出て来たのである。娘の呼称を保留し、ひいてはその立場の確定も保留してまで、二条を後深草院の後宮に配した布石は、ここで活きてくるはずであつた。ただし、文永九年のこの時点で後深草



院政は開始されなかった。同一一年、後深草院皇子の熙仁親王が立太子したことで、後深草院がいずれ治天の地位に就き得る見込みが立った。実現したのは、さらに一二年の後である。もし後深草院政開始が早かったならば、作品内の主張通り、雅忠は大臣に任じられていた可能性が高かった。

### 三 言表と虚構

既定であつたかのごとく本作に描かれる、雅忠の任大臣は、雅忠生前に二条の描いていた遠い未来の希望に過ぎなかったのか。

言表①③が、雅忠の任大臣実現への高い可能性を示唆することを、作品の背景に近い時代を生きていた読者は、どう受け取つたであろうか。再検討する。

ここに、作品の真実と、事実・史実との間の齟齬が、主としてどこで生じたのかという観点を導入してみたい。なおM・フーコーは講演「作者とは何か」<sup>(37)</sup>において、まず「ある語り手による物語というかたちをとつた小説では」と限定し、「作者を現実の作家の側に探すのも、虚構の発話者の側に探すのも同様に誤りでしょう。機能としての作者はこの分裂そのもののなかで——この分裂と距離のなかで作用するのです。」と述べた後に、「小説や詩の言説」という枠を取り払い、「実際には、機能としての作者を備えた言説はすべてこの複数の自己を含んでいるのです。」とした。この分析を部分的に援用し、いわゆる「作者」を、書き手とも、作品内で登場人物としてふるまう作者とも同一視せず、その「分裂と距離のなかで作用」する存在と見做したい。その前提に

立つて、種々の齟齬を、おおまかに次の三つに分類できまいか。

A 書き手のなかで生じた無作為のずれ。

作品内でふるまう作者と、書き手との認識は一致。書き手の認識する「事実」が史実とずれている。

書き手一人の思い込みや記憶違いの類。

B 作品のために書き手が生じさせた、意図的なずらし。

作品内でふるまう作者と、書き手との認識が不一致。書き手の認識する「事実」は史実と一致。

粉飾、麗化、物語化の類。

C 作品の外部、書き手の外部で生じたずれの、作品への反映。

書き手の意図的な反映か、無作為の反映かは問題としない。

作品内でふるまう作者と、書き手との認識の一致、不一致も問題としない。書き手の属する集団の認識する「事実」が、

政権を掌握している他集団の認識する「事実」であるところの「史実」と不一致。書き手の属する集団には、「家」や、政治的に近い間柄の集団などが想定できる。

集団間の見解の相違の類。

作品を通して明確にできるのは、作品内で登場人物としてふるまう作者と、機能としての作者のみである。書き手の認識は推定することになる。したがってこの三分類は、読者によってどう分類され得るか、という検討において特に意味を持つ。

読者が、言表①③の内容、及び示唆するところを虚構Aと捉えた可能性を検討する。この場合、雅忠の任大臣問題は、後深草院の名をさえ騙って示した妄想に過ぎない、との評価も下され得

る。しかし、少なくとも書き手は、そのような評価を排除するべく、二条以外の人物を多数関わらせて叙述したものと思われる。

言表①は、申文を受け取った後深草院と、申文執筆者雅忠とに共有されたと描かれる。言表②は、作品内で登場人物としてあるまう二条の心情であるが、慮られる家司、という他者の存在を含有する。言表③は、最初に発言した雅忠、聞き入れて消息に引用する後深草院、<sup>38</sup>消息の読者東二条院に共有されたと描かれる。

読者が虚構Bと捉えた可能性を検討する。この場合、本作は日記より物語に近いものとして読まれることになる。言表①及び言表③の文面が共に作者の創作であった場合、虚構Bである。ただし、言表①のみが真に雅忠の手になるものだった場合、あるいは、言表③に関して雅忠の発言部分だけでも事実だった場合、二条と父との認識であり、虚構Cの「家」<sup>39</sup>の認識となる。

読者が虚構Cと捉えた可能性を検討する。この可能性を増すのが、言表③の前に後深草院自身の言として引かれる「大納言、二条といふ名を付きて候ひしを、返しまゐらせ候ひしことは、世隠れなく候ふ。されば、呼ぶ人候はず、呼ばせ候はず。」である。「世」には、少なくとも後深草院の管轄し得る範囲が包括されているだろう。呼称の確定の保留が周知されていたなら、二条にはいづれ、しかるべき呼称が与えられるはず、と「世」が認めていたことになる。それは引いては、雅忠にとって大臣が「定まれる位」である、と「世」が認めていたことにも通じる。また、呼称を保留された当人の二条も、父の任大臣に関わるこの認識を共有していたことになる。二条と父との共通認識である、という意味では虚構

Cの「家」の認識と言え、後深草院、東二条院と「世」の共通認識である、という意味では「持明院統」の認識とも言える。雅忠の任大臣が規定路線であったことは二条の「家」の認識であるばかりか、それは治天となる前の後深草院や「世」、言い換えれば、持明院統が政権を掌握していなかった時点での、持明院統側の共通認識であった。言表①～③は、そう読まれ得た。

#### 四 結論

前節で得られた考察を本作の理解にどう活かせるか。政権掌握以前の「持明院統側」の認識は現実問題として実現し得ず、それは虚構に他ならない。雅忠の寿命がもう数年長かったとしてさえ叶わなかったと見込まれるこの認識は、到底史実とは認定できない。しかし、虚構の対義語としての「史実」として、その当時の為政者側の見解に過ぎないことは注意される。

両統迭立の時代にあつては、為政者が不規則に交替した。したがって、前の時代に正当と見做された事柄が、一朝明ければ認められなくなることも、また、その逆もあり得たであろう。裏を返せば、虚構Cのうち「持明院統」側の認識は、政権移行の暁には、新たな為政者公認の正当な認識となり得る、限りなく有意の虚構であつたはずである。

第二節 i、ii において、雅忠任大臣問題の真偽認定は、あくまでも史実に即して行なつた。しかし iv で言及した通り、史実に反し、後嵯峨院没後に後深草院が治天となつていたら、雅忠が大臣に任じられていた可能性はずっと高まる。持明院統に心を寄せ

る者にとつては、その虚構こそが「正当」で、後深草院政が一旦は回避された史実こそが不当と言えよう。つまり、筆者が雅忠任大臣問題を、持明院統公認の虚構Cとして描出するならば、一定の読者には、史実とは異なる「真実」として了解されたのではない。

ここで、「持明院統」側の公認事項でありながら、大覚寺統治世下において史実として実現しなかった虚構Cのような描写を、同情的、肯定的に受容する心性を持つ読者層の存在を想定したい。本作の成立の上限は、後深草院三回忌の記事から徳治元（一三〇六）年七月である。伏見、後伏見と持明院統の天皇の即位が続いた後に、大覚寺統の後二条天皇が即位、父後宇多院が院政をしく中、皇太子としては持明院統の富仁親王（のちの花園、延慶元（一三〇八）年即位）が控える、という厳しい両統迭立のただ中である。このような政情を経て成立した本作が、雅忠任大臣問題を史実以上の真実として描くのはもつともであった。

Cに分類できる虚構には、虚構Aに備わるある種文芸的な要素とも、錯誤に近い虚構Bとも異なる意義が託されている。虚構A、B、Cはいずれも『とはずがたり』の真実であり、等しく重要だが、その性格は異なる。虚構の分類が有効と考える所以である。先行研究は、『とはずがたり』には虚構が多いと見做してきた。本論文は、雅忠の任大臣実現の可能性が高いとする叙述を、新たに虚構と位置づけた。ただし、『とはずがたり』がこの虚構を、二条や二条の「家」のみの独善でなく、持明院統側の「真実」と呼べる仮想として描こうとした可能性を再度強調しておきたい。

家々が分立し、各統に接近し、それぞれに自らの主張を掲げ、正当と認められようとした時代。両統迭立の時期をそう捉えるならば、『とはずがたり』は両統迭立の時代に生まれ、この時代の特徴をよく反映した作品と言い得るだろう。

注(1) 中野幸一「女流日記文学の完成 記録から文学へ」（国文学解釈と鑑賞）七九二、一九九七・五。

(2) 『とはずがたり』本文の引用及び頁数は、新日本古典文学大系50『とはずがたり たまきはる』（三角洋一校注）に拠る。

(3) これらの言表は、主体が同一でないが、本論文では並列させて検討する。複数の言表から一定のメッセージが受け取られるとき、そのメッセージは「作者」の主張であり、作品の「真実」である、との見通し、もしくは仮定をもつて、論じるためである。ここで仮定する、作品の「真実」を主張する主体としての「作者」は、『知の考古学』の出版を控えたM・フーコーが一九六九年「作者とは何か」（松浦寿輝編『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ 歴史学／系譜学／考古学』（筑摩書房、一九九九）所収、根本美作子訳）と題した講演で分析した、「機能としての作者」にあたる。

(4) 標宮子「中院（久我）雅忠・二条父娘の拘り―素服を賜る人々―」（『とはずがたりの表現と心―問ふにつらさ』から「問はず語り」へ）第三編第二章、聖学院大学出版会、二〇〇八。

(5) 例えば、後嵯峨帝の中宮西園寺嫡子（大宮院）の中宮権大夫であった中院通成は、後深草帝の中宮で嫡子の妹にあたる西園寺公子（東二条院）立后時に、中宮大夫となっている。

(6) ただし文応二（弘長元）年には、信子は中宮、師繼は中宮大夫。

(7) 「五夜 后父又流例也」（『山槐記』治承二年八月二日条）。

(8) 院号の選定については橋本義彦「女院の意義と沿革」（井上光貞博士還暦記念会『古代史論叢』下、吉川弘文館、一九七八）、高松

百香「平安貴族社会における院号定 女院号の決定過程とその議論」(『女と子ども』の王朝史―後宮・儀礼・縁―森話社、二〇〇七) 参照。

- (9) 中宮嬪子が後深草院猶子の資格で入内したことを勘案すると、西園寺家と洞院家との競いに加え、後深草院と龜山帝との確執をも背景に読み取り得るか。后が院の猶子として入内することの意義については、後稿を期したい。

- (10) 『明月記』は中宮有子退出以前に「巷説云、后宮不可転、可被廢云々、罪科何事哉、(中略) 心中可察、」(嘉禄二年三月四日条)と記す。

- (11) なお、長講堂領を相続した鷹司院は四条帝准母とされた(『玉葉』嘉禄三年七月一七日条)。

- (12) 『明月記』建仁元年一〇月一七日条。

- (13) 上横手雅敬「鎌倉初期の公武関係」『日本中世政治史研究』第三章第一節、塙書房、一九七〇) 参照。

- (14) 『公衡公記』弘安六年八月一三日条。

- (15) 野村育世「女院と家」(『家族史としての女院論』第六章第一節、校倉書房、二〇〇六) は「二条天皇と高松院妹子は香隆寺に(中略) 一緒に葬られており、王家における夫婦関係の緊密化が指摘できる」とする。表一のうち高松院は別格と考えるべきであろう。

- (16) 『増鏡』「あすか川」は、東宮世仁親王が七歳の夏、「かばかりになりては、御灸なくてはまがまがしき御事いづくべし」(本文は講談社学術文庫本に拠る)と騒がれる程の病態であったと記す。『吉統記』文永一〇年九月四日条、二一日条から史実として確認できる。

- (17) 『吉統記』は「采月五日可有立坊云々、可悦々々、俄有沙汰、被仰合閑束之处、可然之由申御返事故歟」(文永五年八月一日条)と、その急であつたことを記す。

- (18) 院司、家格等の要素を省き、中宮職・春宮坊の「大夫」という政治的立脚点に着眼する。

- (19) 『吉統記』は師継の拝賀が「任元久之例」せて行われたことを記す。

し、「元久花山右府(忠経)、自大夫任大臣、彼例歟、」(文永八年三月二九日条)と付言する。

- (20) 関東申次としての実氏の活動を重く見る説に、美川圭「関東申次と院伝奏の成立と展開」(『院政の研究』第七章、臨川書店、一九九六)がある。根拠として美川氏の示す「公衡公記」弘安六年七月二一日条の解釈に対する異論が、白根靖大「関東申次の成立と展開」(『世の王朝社会と院政』第四章、吉川弘文館、二〇〇二)に載る。

- (21) 誕生が子刻「吉」であつたため、一八日(『歴代皇紀』「御遊抄」、一九日(『一代』)の両説が行われている。当時の日付変更の意識(橋本義彦「生日と歿日」(『平安貴族社会の研究』第五部、吉川弘文館、一九七六)参照)に則り一八日とした。

- (22) 橋本義彦「院評定制について」(注(21)、前掲書、第一部)。

- (23) 上横手雅敬「鎌倉幕府と公家政権」(『鎌倉時代政治史研究』第一章一、吉川弘文館、一九九一)。

- (24) 美川圭「院政をめぐる公卿議定制の展開―在宅諮問・議奏公卿・院評定制」(注(20)、前掲書、第八章)。

- (25) 注(24)、前掲論文。白根靖大「鎌倉後期の公家社会と治天」(注(20)、前掲書、第九章)も同趣旨。

- (26) 『吉統記』文永五年六月一四日条ほか。

- (27) 議決の実効性に関わらず、文永八年当時の院評定衆を確認できる記事として重視する。

- (28) 本郷和人「後嵯峨院政―後期院政の成立―」(『中世朝廷訴訟の研究』第四章、東京大学出版会、一九九五)。

- (29) 源氏長者の権能については、堅月基「鎌倉・南北朝期の源氏長者」(『日本歴史』六一〇、一九九九・三)、岡野友彦「源氏長者の淵源について」(『中世久我家と久我家領荘園』第一編第一章、続群書類従完成会、二〇〇二)参照。堅月氏は、基具らの准大臣待遇を、源氏長者と大臣位との密接な関係の表れと見做す。

- (30) 『公』によると、後嵯峨帝の治世のはじめに内大臣であつた鷹司兼平以降、家基の前任者花山院師継までの一六人の内大臣のうち、

摂関家の子息は六人。任大臣時の年齢は、鷹司兼平一四、二条道良一七、近衛基平一三、鷹司基忠一五、一条家経二〇、二条師忠一六である。一三・二〇歳と幅があり、平均で一五・八歳である。

(31) 基具自身、任太政大臣を望む後年の款状に「一大納言勞十一年希代之沈淪候」(『公衡公記』弘安一年正月二六日条)と記す。黒板伸夫「官職唐名の一考察―参議の唐名および儀同三司について」

『撰問時代史論集』第一部、吉川弘文館、一九八〇参照。

(32) 黒板(注31)、前掲論文参照。『公』弘安七年条ほか。

(33) 黒板(注31)、前掲論文は「大臣に准ずる地位を与えられたのは、寛弘五年正月十六日、大臣に准じて封戸を賜わった時とすべきであろうが、寛弘二年二十五日、朝参を聴され、座次を大臣の下、大納言の上に定められたときにさかのぼらせることも」可とする。

(34) 市沢哲「鎌倉後期公家社会の構造と「治天の君二」(日本史研究三一四、一九八八・一〇)は、「貴族人口の増加した結果、官位数が相対的に減少し、貴族間のポスト争いが激化した」が、「この貴族人口の増加をもたらしたのは分家の進行であった」と考察する。

(35) 注(4)、前掲論文。

## 新刊紹介

田淵句美子編

『十六夜日記 白描淡彩絵入写本・

阿仏の文』

本書は、国文学研究資料館蔵『十六夜日記』『阿仏の文』の影印とその正確な翻刻に、詳細な注釈を付したものである。

『十六夜日記』は、万治刊本に近い本文

(36) 注(22)、前掲論文。

(37) 注(3)、前掲フーコーの講演。

(38) 言表③に関して標氏は『中世日記紀行文学全評釈集成 第四巻』とはすがたり(勉誠出版、二〇〇〇)において「院の手紙の文面には文飾がかなり施されている、と考える方が自然」とし、「手紙という媒体のもつからくりを巧みに利用して、これは私が書いたのではない、院御自身が認(した)めたものである、紛れもない真実であるという印象を読者に与えながら、実は雅忠一条親子が最も主張したい内容を、最も深く理解してほしかった当の人物、後深草院自身に語らせるという、実に巧妙なレトリック」と評する。

(39) ここでいう「家」とは、「一組の夫婦を中心とする生活・経営体である個々の「イエ」「イエ」が主として父系的に結合した集合体」(高橋秀樹「貴族層における中世的「家」の成立と展開」(日本中世の家と親族)吉川弘文館、一九九六)と定義される「中世的な「家」を指す。本論文では、作品や史実から、雅忠・二条の「家」が久我家においてどう位置づけられるか触れ得なかった。別稿を期したい。

を持つ写本で、近世初〜前期頃の書写とされる。原本見開きの影印を各ページの上部に配置、その下に対応する翻刻と注釈が掲げられ、原本を読み進めるように作品を味わえる造りになっている。また、当該本は九葉の挿絵を持つことで、極めて珍しい。挿絵部分はページ一面に拡大して掲載されるので、奈良絵風の繊細な描画を細部までじっくりと眺めることができる。

一方の『阿仏の文』は、『乳母のふみ』『庭

の訓』の名でも知られる作品で、阿仏尼が娘に宛てて書いた消息(書状)である。こちらは、右ページに影印、左ページに翻刻と注釈を掲載。室町期写の最古写本として、当該本は極めて貴重だと言えよう。

巻末には、最新の研究成果に基づく解説も収載する。研究に資するのはもちろん、読んでも見ても楽しめる一冊である。

(二〇〇九年三月 勉誠出版 B5判 一〇〇頁 税込五〇四〇円) [銚 武彦]